

大橋 秀雄*

1. パロディ「何のために学ぶのか」

大学受験を間近に控えた高校生とその母親との対話が、下記の4コママンガでコミカルに描かれている。先ずこれをお読みいただきたい。



図1

最初の3コマは、何のために勉強するのかという息子の問いに対する導入部であり、4コマ目がその結末となっている。この結末では、言葉に窮してカッとなった母親が、「つべこべいわずに」という答えにもならない答えで締め括っている。読者ならどう答えますか？これに真面目に答えようと試みるのが、本文の意図である。

最初の3コマを共通のプロローグとして、結末部分を公募したら、恐らく驚くほど多様で、興味津々の結果が得られるだろう。私は身近な方に声をかけて、結末を考えていただいた。これをオムニバスパロディと



図2

称して、原作者の了解を得て以下にその数例をご紹介します。

もっともっと傑作をご紹介しますところであるが、いささか遊びが過ぎたところもあり、この位にしておこう。広く会員から公募して傑作例を集めたら、協会の目玉出版物になるかも知れない。

これがアメリカの親だったら、大学を出たり大学院を出たりして高い学歴を持つことが「立身出世の近道よ！」とあっさり割り切るに違いない。そしてそれが

*平成14年4月23日 *工学院大学



図 3

役割を果たして下さってきた。昨年11月には、神奈川県が主催する「ロボフェスタ神奈川・横浜大会」に相乗りする形で第8回青少年科学技術フォーラムが開かれ、パシフィコ横浜会議センターが会場となった。真打ちはもちろん常連の有馬先生であるが、それに続いて工学会会長も応分の責を果たせということとなった。私はこれを若い人に直接話しかける貴重な機会として捉え、ズバリ「何のために学ぶのか」と題して苦心のパワーポイントを作り上げた。

集まったのは横浜周辺の中学、高校の生徒たちと年配の大人たちだった。最初のスピーカーの有馬先生は、寺田寅彦の生き方を事例にとって科学と人間性の関わりを語り、若い人も眼を輝かせて聞いていた。続いて私の番がやってきた。私は冒頭で紹介したマンガをイントロとして、「何のために学ぶのか」なるべく平易に語りかけ始めたが、しばらくすると若い人の半分くらいがゾロゾロと席を立って帰ってしまった。有馬先生の名前に惹かれて集まった人も確かにいた。しかし半分も帰ってしまった原因は、単に知名度の違いだけではないことに後で気付いた。それは中高生にとって、それも土曜日の午後わざわざ科学技術フォーラムに参加しようとする真面目な中高生にとって、「何のために学ぶのか」など教えてもらわなくても分かっていたからである。それは単純明快で、いい高校、いい大学にはいるためなのである。私の話は、むしろ残って最後まで聞いて下さった大人たちには好評だった。しかし若い人とは、残念ながら全くのすれ違いで終わってしまった。

これが、私が受けたパシフィコ横浜の衝撃である。病根の深さに対して暗澹たる気持ちを抱かせる衝撃であったが、あれは当然だと解説して下さる方もあった。中学、高校の時代は、「何のために学ぶのか」など余計なことを考えずに、入試突破に全力を尽くした方があとで伸びるといっているのである。そうなのかと、なかば肯定しながらも、それが教育をむしろむ元凶だと思いは、依然として捨てきれない。

3. 知のプロへの道

若い人には拒絶されてしまったが、パシフィコ横浜で私がどのような論旨で、どのように訴えたか以下に再現してみよう。

例のパロディを二三紹介して息をぬいたあとで、私はイチローと中田英寿を大写した絵でスタートした。「イチローのようにになりたいでしょう」と聞かけると、誰もこれに異論はない。あったとしても、中田の方がいいというのが関の山である。世界に通用するプロとして脚光を浴びたいと夢見るのは万人共通であるが、それを実現できるのは、恵まれた才能に恵

現実でもある。日本の親には、これを言い切る自信がない。大学は学問を教えたり、学歴をつけたりはしてくれるが、知力を高め、この知価社会を生き抜く戦闘力を強化してくれる場だとは全く期待していないからである。だから、まさにパロディの宝庫となる。

2. パシフィコ横浜の衝撃

大学生を相手にしている大学教員は、入ってくる学生たちが「何のために学ぶのか」はっきり目的意識を持っていないと嘆くことが多い。五月病は、かつては新入大学生の専売だったが、今では新入社員の方が重病らしい。

大学生になってから「何のために学ぶのか」考えるようでは手遅れである。もっと早い時期から、この問題にきちんと答えを出しておかなければならない。こう考えた私は、「何のために学ぶのか」若い人に直接問いかけ、考えさせるきっかけを作りたいと願っていた。

日本工学会は、青少年に科学技術の面白さ、楽しさを直接訴えるために、毎年全国各地で「青少年科学技術フォーラム」を開催している。毎回講師をお願いしている元文部大臣有馬朗人先生が、巧みな話術に加えて実験を交えて聴衆を惹きつけ、科学技術の伝教師の



図 4

まれ、想像を絶するトレーニングに耐え、そして運が味方する一握りの人たちである。

スポーツのプロは、まさに強い個人の象徴である。しかし強い個人は、なにもスポーツの世界に限らない。政治の小泉総理、ノーベル賞の野依教授、アニメの宮崎監督、マイクロソフトのビルゲイツ、音楽の小沢征爾そして宇多田ヒカル、それぞれの世界で生き生きと活躍している人たちは、みなその道のプロであり、輝くような強い個人である。



図 5

しかし世の中は、有名人だけで動いているわけではない。無名ながら、きちんとこの社会を支えている無数の人たちがいる。学校で諸君を教えて下さる先生方は教育のプロであり、私が体の調子が悪くなると駆け込む近所のお医者さんは健康のプロである。たくさんの無名のプロたちが、それぞれの役割に誇りを持ちながら、責任をもって仕事を果たしている。有名人はそういう人たちの代表に過ぎない。信頼感のある社会を支える真の担い手は、無名の無数のプロたちである。

親から貰った遺産で島を一つ買い、そこで一生遊ん

悔いのない人生を送って生命を全うする

そのための条件

- 人間として尊敬できる。信念、礼節、思いやり、、、しっかりとした人間観、世界観を持っている。
- 何かに優れていて、社会の中で重要な役割を担っている。

こうなることが学ぶ目的

図 6

で暮らしたとする。他人からは羨ましがられても、いつかその人は満たされぬ思いに悩むことになる。ひとは、社会との関わりを抜きに、多彩で充実した人生を送ることはできない。

悔いのない人生を送って生命を全うする。そのための条件として、私は次の二つを考えている。

- 1) 人間として尊敬できる。信念、礼節、思いやりがあり、しっかりとした人間観、世界観を持っている。
- 2) 何かに優れていて、社会の中で重要な役割を担っている。

学ぶ目的とは、まさに上の二つの条件を実現する手段に他ならない。

学ぶ目的

- 自分で判断し、自分で考えて行動できる 自立した個人に成長するため → 教養教育
- 職業を通じて、社会の中で信頼される役割を果たすため → 専門教育

人間の両手のように、助けあって力を発揮する

図 7

第一の目的は、人間教育あるいは教養教育と呼ばれるが、簡単にいってしまえば成熟した大人になるためのものである。小さい頃から言葉を覚え、文字を習い、自分の外に広がる世界から知識を取り入れながら、だんだんと自分の判断で行動する自立した個体に成長してきた。この過程こそが、学ぶことの最も基本的な形態である。初等中等教育を終えたものは、本来一人の

市民として行動するのに十分な教育を受けたはずである。しかし学ぶこと、考えることを通じて人間としての深みや厚みを増してゆくことは、これは一生を通じて終わることのない課題である。したがって、人間教育・教養教育は、大学教育の中でも依然重要な一部を占めることになる。わが国ではまだ例が少ないリベラルアーツ教育は、これに特化することを特色としているが、それ以外の教育では、教養教育と次に述べる専門教育が、目的に応じて配分されている。

学ぶことの第二の目的は、社会の中で自分の役割がきちんと果たせるようになるためである。安定して信頼感のある社会は、市民一人一人が専門性と責任感に裏付けられた特定の役割を果たすことによって実現される。その役割こそが職業であり、人間の社会的な評価や尊厳は、職業を誠実に果たすことを通じて定まってくるといってもよい。

世の中にはいろいろな職業があり、難易度に応じて様々な段階がある。難しい職業ほど、教育と訓練に長い時間がかかる。難しい方の代表的な例として、我々の命を預かるお医者さんがある。医者になるためには、少なくとも6年間の大学教育と、医師の国家試験に合格することが求められる。そのような高度な職業は、英語ではプロフェッション、日本語では専門職業と呼ばれる。プロというと、我々はすぐプロ野球とかプロレスの選手を頭に描くが、高度な知的トレーニングを必要とする仕事をこなす人も、紛れもないプロである。その意味で、お医者さんは、まさに我々の命と健康を守ることを使命とするプロである。そして、科学技術を支える科学者や技術者も、これもまた立派なプロである。

大学における専門教育は、まさに高度な知のプロを育てる教育であり、これができるところに大学の特権がある。

“若い諸君！もしスポーツの才能があったら

イチローに続きなさい。もし音楽の才能があると思ったら、オザワでもヒッキーでもいい、自分の才能に賭けなさい。もしお笑いの才能があると思ったら、爆笑問題を超えればいい。その挑戦に、大学は全くと言っていいほど役に立ちません。

大学は、これといった際立った才能のない人、そしてそういう人が大部分なのですが、そういう人たちに勇氣とチャンスを与える場なのです。納得のゆくまで、思う存分勉強しなさい。そうすれば、知識が基盤の高度な職業を立派にこなすことができます。将来知識ベースのプロとして、高度な知識をますます必要とする21世紀の社会のなかで、立派に役割を果たして自分の存在を確認することができます。それは日々のパンを得るといふ現実的要求を超えて、自らの可能性を最大限に発揮して悔いのない人生を送る最良の選択となります。そのつもりで、さあ大学にいらっしやい！”

以上が、若い人に対する私のメッセージであり、今も変わらぬ考えである。

4. 学尊業卑

私が若者に訴えた考え方は、恐らく今でも多くの大学人の反発を受けるだろう。JABEEの立ち上げに先立ち、私は多くの大学で技術者教育の必要性を訴える機会を持ったが、講演後うしろの席から「そんな話は専門学校に行ってやってくれ」とやんわり非難の声が挙がるのをたびたび経験した。真理と学問に仕える大学人にとって、職業という言葉はタブーであり、卑しむべき対象であった。自分だって、教師という職業人であることを忘れて！

官尊民卑、男尊女卑のように尊と卑を対比させる四文字熟語はいろいろある。私は学尊業卑という新語を提案して、我々の意識に潜む固定観念をあぶり出したと思っている。

我が国では、それぞれの時代を通じて学問を尊ぶ気風が生き続けてきた。戦前全国の小学校の校庭に置かれていた二宮尊徳の銅像は、まさに学問こそ美德という教えの象徴であった。

これに比べると、「なりわい」に関わる「業」は、医者とか右筆とかの特殊な例を除けば卑賤なものとした。これは士農工商という身分制度の下層部分と業が重なり合い、業を修得することは、世過ぎ口過ぎの便法に過ぎないという意識が染み付いてきたからであろう。これは中国・韓国でも色濃く認められる意識で、東洋思想の一つの伝統かもしれない。

学を究めて悟りの境地に達した「聖者」がいたとしても、隔絶された山奥に潜んで世間との接触を断てば、社会的には存在しないと同じである。本を書く（著述業）、求めに応じて教える（教育業）ことがあれば、

大学の存在価値

- 芸術的才能も、社交的才能も、肉体的能力も、そこそこの人(これが大部分)はどうしたらよいのか？
- 努力すれば、知識が基盤の高度な職業を立派にこなすことができる。
- 大学は、そのような人に、将来自立した専門職として羽ばたける基礎力を与える場である。知識ベースのプロへの道

図 8

それは業を担うことを通じて社会的存在に変わる。業は糧を得る便法を超えて、自らの「尊」を賭ける営みそのものである。

学尊業卑の潜在意識は、知のプロという意識の浸透を妨げ、日本の大学教育にも深い陰を落とし続けてきた。Engineering educationは、本来技術者を育成する専門職教育でありながら、対応する日本の工学教育は、技術に関わりの深い学問—工学—を教えることに特化してきた。医学部は医学を教える場所ではなく、医業に従事する専門家—医師—を育成する場である。法学部は法学を教える場所ではなく、弁護士や裁判官などの法曹を育成する場である。最近になってようやく意識が変わり始め、大学における専門職教育が段々と正当な位置を占めるようになってきた。このような方向転換は、ロースクールを始めとする専門職大学院の具体化を突破口として、今後確実に加速されてゆくはずである。

国が困難な状況に陥ると、教育の重要さが改めて蒸し返され、教育、教育の大合唱が起こる。わが国は、今まさにその状況にあり、初等中等教育から始まって、高等教育、CPD、リストラ中高年の再教育に至るま

で、教育の建て直しが急務となっている。

教育は、学ぶ意欲の上に成り立つ。「何のために学ぶのか」明確に自覚しないままに教育を強制すれば、効果が挙がらないままに、わが国は苦痛と忍耐を強い教育収監列島に化すのみである。

この一文が、「何のために学ぶのか」論議に火を着け、一刻も早く過去のお笑いぐさになることを願うのみである。

終わりに、オムニバスパロディに参加して下さった小野田武、町田輝史、志田茂、伊東誼の各氏に感謝する。

著者紹介



大橋 秀雄

1954年 東京大学機械工学科 卒業

Dr.-Ing. 工学博士

現在 工学院大学学長、日本工学会会長、
日本工学教育協会副会長、日本技術者教育認定機構副会長、大学基準協会理事、私立大学情報教育協会監事、東京大学名誉教授